
星と月の奇跡

文樹妃

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

星と月の奇跡

【Nコード】

N1835E

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

出逢った瞬間、運命を感じたの！いきなり告白して、玉砕。それでもあきらめない、天然少女の恋の猛アタックが始まる。冷たい彼は、果たして振り向いてくれるのか。（べたべた恋愛同好会、企画参加作品です）

(前書き)

べたべた恋愛同好会、第一回企画テーマ「出逢い」参加作品です。

星と月の奇跡

出逢った瞬間、思ったんだ。

この人が、あたしの運命の人なんだって。

だから、あたしは言ったの。

きらきら光るブルーサイドで、もっと光って見えた、彼に向かって。

あたしのと きめきを、この胸の高鳴りを伝える言葉を。

「あの……好きです！ 私と、付き合ってください！」

更衣室の、ロッカーの扉を開けながら、美夏ちゃんが笑った。

「いや〜長い付き合いだけど、さすがに今日は驚いたわ」

黙って水着を脱いでいる私を横目に、美夏ちゃんは続ける。

「まあ、あれだけあっさり断られちゃ、あきらめも付くってもんでしょ！ それにしても、いきなり告白する星奈せいなのほぅが、びっくりだけどね〜。

今見たばっかで、さすがに『好きです』はないんじゃないの〜？」
明るい声で、一人話す美夏ちゃんは、私の反応がないことを気にするように、少し黙る。

それでも黙々と、着替えを続ける私が、落ち込んでいるとでも思ったのか、うってかわって、優しく肩を叩いてきた。

「とにかく 元気出しなよ！ 確かにかっこよかったし、溺れたところを助けてもらっちゃ、ポイントは高いけどさあ。

あんな冷たい断り方する奴なんだから、性格はどうだかわかんないよ？ さっさと忘れて、またいい男探すのがいいって！」

ねっ、と覗き込まれた時、ちょうど私は着替え終わったところだった。オフホワイトのワンピースを整えて、私はまだ少し濡れたま

まの髪を、簡単にまとめる。

そして、顔を上げて、美夏ちゃんに笑った。

「ごめん、私、急いで行かなきゃいけないの。またメールするね！」
私の上機嫌の笑顔に、驚いた美夏ちゃんが呼び止めるのが聞こえる。それでも私には、急いでやりたいことが　いや、やらなきゃいけないことがあるんだ。

最後にもう一度だけ振り返って、手を振ると、私は急いでサンダルを履いて、更衣室を飛び出すのだった。

目指すは、彼の背中　今日知り合ったばかりの、私の好きな人。

じりじりと焦げ付くような太陽が、まるで私を応援しているように見えた。

「またあんた？　これって、ちょっとしつこいんじゃないの？」

眉をひそめて、そう言い放った彼に、私は笑ってみせた。まだ荒い息を整えて、吹き出た汗を手の甲で拭う。

一緒に歩いてた友達らしき人も、私のことをじっと見ている。こっちの視線は、ちょっと面白いがるようなものだけ。

気にせずに、私は彼を見上げた。大丈夫、追いつけただけでも、神様は私の味方だ。

「だって、あなたのこと、何も知らないくせにって言ったでしょ？」

そう言った私に、彼は眉間の皺を一層増やした。

「それが何か？　だって、事実だろ」

不機嫌にそう返されても、私は笑顔を崩さなかった。だって、嬉しいのだ。彼の声が聞けるだけで。

「うん、事実。だから、まずは知ることから始めなきゃ」

「知るって、何を」

言いかけた彼に、私はお気に入りの、お花のついたかご型バッグ

から取り出した、生徒手帳を見せた。

「私、天野 星奈。百合丘女子高の一年です！ 趣味は、読書とお菓子作り。あ、今度、何か作りましょうか？ マドレーヌとパウンドケーキとどっちが……」

迷う私を前に、彼は冷たく一言。

「それ、何」

「えっ、だから、自己紹介 相手のこと聞く前に、まずは自分のことを言うのが礼儀でしょ？」

もっとよく見えるように、生徒手帳を近づける私から、彼は少し離れて、嫌そうな顔をした。

「誰もそんなこと聞いてないし、あんたのことなんか、知る気もないから」

はつきりそう言う彼の腕を、横で友達がつついていっている。それでも、彼は気にする様子もなく、私から目をそらして、歩き出す。

その広い背中を、私は必死で追いかけた。

「待って！ せめて、あなたの名前……」

あんまり走るのに慣れてない私は、さっきの全速力で力を使い果たしたみたいで、足がもつれてこけてしまった。

その音に、一瞬だけ振り向いた彼は、何も言わずに、また背を向けた。

助け起こしてくれたのは、彼の友達で、彼の視線で、あわてたように付いていく、その一瞬前 教えてくれた情報に、私は顔を輝かせた。

やっぱり、神様は私の味方だ。

白川学院高等学校 堂々と踊る文字を眺めて、私は呼吸を整えていた。

今日ここに勇んでやってきたのは、もちろん、大事な計画のため。

彼 杉里^{すぎら} 月也くんを徹底的に調べよう、計画の。

ものすごい暑さに、頭がちよつとふらふらするけど、それでも構わない。普段の私からしたら、考えられない行動だ。

でも大丈夫、恋は女を強くするんだ！

「ねえ、星奈く帰ろうよ。さすがにこれは、やりすぎだつて！」

心配性の美夏ちゃんが、私の腕を引きながら小声で言う。

「だめだよ、まだまだ情報が足りないの！」

月也くん情報を書き連ねたメモと、私はにらめっこする。

夏休み中とはいえ、部活動で登校している生徒たちに何度か訊ねて、得た貴重な情報だけど、まだまだ足りないんだ。

「ようし、またまた突撃、行くぞ〜！」

あれ、あれれ？ ところが、踏み出そうとした私の足は、なんだかふらついて、視界がぐらりと回りだす。

「あつ、ちよつと星奈！ きゃ〜！ 星奈っ！」

背後で響いた美夏ちゃんの悲鳴を最後に、私の意識は途絶えた。

白いベッド、白いカーテン、白い壁……視界を埋め尽くす白一色に、私はぼんやりと瞬きをした。

「星奈、気づいたの？ 大丈夫？」

心配そうに私の元へやってきたのは、美夏ちゃん。そしてその隣に腰掛けていた人物に、私は大きく目を見開いていた。

「あつ！ あの時の……」

思わず指差して叫んでしまった私に、その人は苦笑する。

「どうも、俺、藤田 純平。一応、月也の友達やってます」

「星奈が倒れた時、困ってたら、偶然通りかかって、保健室まで運んでくれたんだから。感謝しなさいよ！」

美夏ちゃんの叱り付けるような顔と、爽やかに微笑んだ彼を見比べて、私はにっこり笑った。

そう、だってやっぱり運命は私の味方だったんだ。まさに救世主

と出逢った私は、ついに最強の作戦実行を果たすのだった。

「今日から、短期バイトに入りました！ 天野 星奈です！ よろしくお願いします！」

気合いを入れて叫んだ私の自己紹介に、皆さんは笑顔で拍手してくれた。ただ一人を除いて。

「なんで……あんたが、ここにいるわけ？」

早速言われたとおりに、本の積み替えをやっていた私は、後ろからかけられた冷たい声に、満面の笑みで振り返った。

「え、だから、短期バイトに入ったんです」

「それはさつき聞いた。そうじゃなくて、何でわざわざ俺のバイト先に来るのかって聞いてんの！」

苛ついたように聞かれても、私は全然平気だった。

だって、こうしてまた会えたんだもん。

やっぱりかっこいいな。なんて、彼の自然な茶色の髪とか、涼しげな瞳とか、ちょっと冷たい感じの口元だとかを見つめていた私に、月也くんは眉を吊り上げた。

「人の話、聞いてんのかよ！」

「あ、はい。えーと、それはもちろん、月也くんがいるからです！ 元気よく答えた私に一瞬たじろいた月也くんだったけど、すぐに気を取り直したように冷たい顔を取り戻した。

「ふーん……ところで、誰から聞いたの、それ。それに、俺の名前まで知ってるんだよ」

「あつ、そうそう、名前だけじゃないですよ。ほら！」

持ち歩いている月也くんメモを取り出して、見せる私。

「杉里 月也くん。白川学院高校の二年三組、成績優秀、スポーツ万能だけど、もったいないことにクラブ活動はしていない。」

夏休みは、午前中は駅前の本屋でバイトで、午後からは塾へ通う毎日。あ、それから、現在彼女なし！　ねっ？　完璧でしょ？」

「だから誰がこんなことを教えたんだって聞いているんだよ！」

「えーと、主に藤田くん情報で、私も現地で調べた結果です。これで、何も知らないくせに、とは言えないでしょ？」

得意げに胸を張った私に返ってきたのは、ものすごく冷たい目だった。

「っていうか、ここまでするか、普通……あんだ、立派にストーカー寸前なんだけど」

じとつと見下ろされても、私は全然平気。だって、これって、立派な会話だもん！

「大丈夫、迷惑はかけませんから！」

「十分、迷惑だって」

にっこりと言い切った私に、月也くんが声を荒げそうになったその時、お客さんがやってきて、その日の会話はそれでおしまになった。

ようし、今日から張り切って、頑張るぞ！

そして始まった、私の『月也くんと、同じバイトで急接近大作戦！』は、順調に進んでいる。

と、言いたいところなんだけど、実はあれから二週間。

残念なことに、月也くんと接近する時間すら、あまりなかった。

だって、だって、この本屋、広すぎる！

私の心の悲鳴は、遠くでレジに入っている月也くんにはもちろん届くはずもない。

大きなターミナル駅だけに、わりと流行っている本屋で、だからこその夏休み限定短期バイトが必要なくらい、店員も多い。

まだレジを任せてもらえない私は、ひたすらあちこちの本の整理

だとか、在庫のチェックだとか、そういう作業をやらされていたりして。

「はぁ……お、重い……」

倉庫に積まれていた本の束の中から、指示されていた雑誌を見つけた私は、店内まで、ふらふらで運ぼうとしていた。

いつもは男の子のバイトさんがやってくれている作業だけど、今日は多忙日らしくて、私にも容赦なく回ってきたのだ。

いくら雑誌とはいえっても、束になると重くて、もともと力仕事も苦手な私は苦戦していた。

倉庫はクーラーも効いてないし、連日の暑さで、私は結構弱っていたんだ。

「あっ」

思わず手が滑って、後悔するも遅し。

店内まであと一歩というところで、私は雑誌をばらまいてしまった。

あわてて拾う私は、ふと足元が影になって、振り返った。

なんと、そこにいたのは月也くんだった。私の後ろで、散らばった雑誌を黙々と拾ってくれていたのだ。

拾い終わった雑誌を抱えて、私は月也くんを見上げた。

もちろん、お礼を言うために。

でも月也くんは、まるで先回りしたかのように、言い放ったんだ。

「言っとくけど、別にあなたのためにやったんじゃないから。これ以上、失敗繰り返されても迷惑だし」

「あ、ご、ごめんなさい……」

慣れないバイトで、色々ミスをしてしまっていたことを、知られていたんだと、恐縮する私を前に、月也くんは目をそらして、腕組みをした。

「あんたさ、もう、無理してバイトすんのやめたら？」

「ど、どうして？」

意外な言葉に、驚いた私を見下ろして、月也くんは続けた。

「あんたがどれだけ頑張ろうと、無駄だから俺、あんたに興味なんか、これっぽっちもないし、これから先、持つこともないと思う。」

だから、期待されても困るし、むしろ、迷惑なんだよ」

月也くんの瞳には、目を見開いたままの私が映ってる。でも、映ってるだけで、彼は一切見てもいないように思えた。

だけど。

立ち去ろうとした、月也くんの背中を、私は追いかけた。

「私、あきらめません！だって、私、月也くんが好きだから」
私の言葉に、月也くんは振り返りもせず、そのままレジのほうへと戻っていった。

全てを拒否するような、その背中を見つめながらも、私は不屈の闘志に燃えていたんだ。

だって、私には、とっておきの情報が、まだあるんだから。

ついにやってきたその日。

バイトを終えて、私はなんとか月也くんのもとへ走った。

「あっ、あの！ 待って月也くん！」

裏の社員専用駐輪場で、自転車を出していた彼は、私の剣幕に驚いたように動きを止めた。

いつもの冷たい表情を、私はどうにかして動かしたくて、笑顔を浮かべる。

そして月也くんのほうへ、手にしていた箱を掲げてみせた。

「誕生日おめでとう！ これ、プレゼントのつもりなの。よかったら受け取って」

言いかける私に眉をひそめて、月也くんは視線をそらした。

「いらないよ」

「で、でも、私　せつかくの誕生日だからと思って……」

必死に追いかける私に、月也くんは苛立ったように目を向けた。

「いいかげんにしてくれよ……別にあなたには関係ないことだろ？」

「関係なくはないかな！　だって、好きな人の誕生日だもん！　お祝いしたいと思うのは、当然のことでしょう？」

思わず叫んだ私を、月也くんは睨んだ。

「大体、俺の誕生日なんて、めでたくもなんともないんだよ……そんなに嬉しそうに、祝ってもらおうような日じゃないんだ！」

今までの冷たい顔が嘘のように、苦しみや悩みがたくさんつまつたような月也くんの顔。

私は驚きながらも、なんだか　嬉しかった。初めて、見せてくれた、本当の顔だったから。

「例え、月也くんがそう思ったとしても、私はこの日に感謝したい。だって、この世に月也くんが生まれてきた日だから。」

私にとって　大好きな人が生まれてくれた、すごく大事な日だから……」

微笑んでそう告げた私を、月也くんは何ともいえない瞳で見つめてた。

その中に揺らいだ一瞬の光は、すぐに隠されて　また意地悪な顔で、私を見たんだ。

「だから……好きだ、好きだって、俺の何を見て言ってるんだよ？　俺はあんたが思うほどいい奴でもないし、優しくなんかない。」

会ったばかりで、話もろくにしたことないし、お互いのこと、知りもしない。そんな状況で、本当に好きになんてなれるわけないだろ！

吐き捨てるように言った月也くんに、私はなおも笑った。

「出逢ったばかりじゃいけないの？」

「え……」

戸惑ったような月也くんの瞳をまっすぐ覗き込む。

「会ってから、時間をかけなきゃ好きになっちゃいけないの？ 何もわからなくても、好きになることだってあると思う。」

だって、恋って、理屈じゃないでしょ？ 少なくとも、私はわかった。月也くんが、私の運命の人だって。ううん、感じたの。この人が好きだ！ って。

それに、月也くんは自分が思ってるほど、冷たい人じゃないよ。本当は優しいのに、わざと冷たくしてる。自分が傷つきたくなくて先に自分から冷たくしてるんだよ。

優しい自分を、心の中に閉じ込めてるだけ」

「な……なんで、お前にそんなこと」

たじろぐ月也くんの胸の中に届くように、私は想いを込めて微笑んだ。

「だって、私もそうだったんだもん。昔、私苛められててあんまり嫌なことがあると、人って気持ちに蓋をしちゃうじゃない？ それで、私は笑うのも、人に期待をするのもやめた時期があったの。でも、そんな私を変えてくれたのは、美夏ちゃんだった。」

ちゃんと人を信じることを、もう一度教えてくれたんだ。だから、私はまた笑えるようになった。それで、私思ったの。なんとなく、月也くんも私と一緒になんじゃないかって。

もしそうなら、私はあなたに笑ってほしい。本当の自分を、素直に出してほしい。そう思ったから……」

私が話すのを、身じろぎもせず聞いていた月也くんに、そっと近寄る。

笑顔でプレゼントの箱を差し出した私を見て、我に返ったように月也くんは叫んだんだ。

「やめる……お前と一緒にするなよ！」

苦しそうに瞳を閉じて、私を払いのけようとしたその手は、白い箱に当たった。

私の手から、音もなく落ちたその箱は、道路の真ん中に、転がっ

て 無残にもつぶれた中身をあらわにしたのだ。

甘い物が苦手な月也くんが、唯一好きだと聞いた、チーズケーキ。チョコペンで心を込めて描いた、星と月の模様と、ハッピーバースデーの文字は、かろうじて見える程度にひしやがっていた。

やっぱり、だめだったのかな……。

運命だつて、一人だけが思つたんじゃ意味がない。

絶対に振り向いてもらうんだ、そう心に決めてた私も、つぶれたケーキの箱を手に、途方にくれていた。

拾い集めて、ため息と共にゴミ箱へ投げ込んだ私は、込み上げてきた涙を拭うことに気をとられて、後ろから近づいてきた人影に気づかなかつた。

「あゝあ、ふられちゃったね。天野さん」

「まっ、町田さん！」

脂の浮いた顔で、笑いかけてきたのは、バイトの先輩だつた。

「彼目当ての子は多いから、まさかとは思つてたけどさ、やっぱり君もそうだったんだ」

そのにやにやした顔が苦手で、あまり近づきたくないと思つてた町田さんは、なぜか嬉しそうに私の隣に並んだ。

「ああいう奴つて困るよなあ、顔だけはよくてもさ、性格なんか最悪なんだつて。ただの見た目で騙されちゃだめだよ」

そう言うと、町田さんはゴミ箱に捨てられたケーキの箱をこれ見よがしに眺める。

「あゝあ、もつたいたい……僕だつたらこんなひどいことしないのになあ。大体、君みたいな可愛い子に好きになつてもらうような資格、あいつにはないんだよ。」

戻ってきもしないじゃないか。あいつが君に何してくれたわけ？

そんなに想う価値、あいつにあるって言うの？」

バイト中の静かな態度が嘘だったかのような、得意げな言い方を
する町田さんを、私は思わず睨みつけた。

「やめてください！ 月也くんは悪くない……勝手に好きになった
のは、私なんだから！」

言い返しても、まだ町田さんはにやにやしたまま私を見てきた。
その目が、何か気の毒なものを見るような、嫌な色に変わってい
く。

「健気だね〜天野さんは……悪いこと言わないからさ、僕にしとき
なよ。僕だったら、君を悲しませたりしないから……ね？」

最後は、囁くようにそう言っ、私の肩を抱いてくる。その脂ぎ
った顔に嫌悪感がおさえられなくて、私は彼の手を振り払った。

「やめて！ あなたなんか……あなたなんか、絶対に好きにはなら
ない！」

今度こそ強く叫んだ私の言葉で、町田さんの顔色が変わった。

「何だと……？ 下手に出てりや、つけあがりやがって」

大きく振り上げられた手に、私は思わず身を縮ませて、目を閉じ
た。でも予想した痛みは、訪れなかったのだ。

「いいかげんにしたら、どうですか」

低い声が聞こえて、目を開けた私の前で、町田さんが手首を捕ま
えられていた。

振り向いた私が見つけたのは 眉を寄せた、月也くんの顔。

「月也くん ！」

戻ってきてくれたんだ。瞳を輝かせた私をちらりと見て、月也く
んはそのまま町田さんを睨んだ。

「すっ、杉里……なっ、何だよ！ お前にそんなこと言う資格、あ
るのかよ！」

町田さんの悔しそうな言葉に、月也くんは冷たく笑った。

「ありませんよ。だけど、あんたに言われる筋合いもないな。自分の嫌らしい顔、一度鏡で見てみたらどうですか？」

口元に笑みをたたえて、それでも睨みつける瞳は真剣そのもので月也くんにも迫力負けした悔しさからか、町田さんは赤くなる。

「なっ、何だと お前、バイトの先輩にそんなこと言っていていいと思っ……」

負け惜しみのように言いかける町田さんの手首を、振り払うように離して、月也くんは彼の前に立ちはだかる。

「じゃあ言わせてもらいますけど、先輩の評判、結構悪いの知ってます？ バイトの女の子にセクハラまがいのことしてっつて噂、皆知ってますよ。」

これで、嫌がる彼女に言い寄ってたことまで知られたら どうなるか、わかりますよね？」

月也くんがそう言い切るのを、彼の背中越しに聞きながら、私は気づいたんだ。こうやって、町田さんから私を遠ざけて、守ってくれていることを。

やっぱり、月也くんは優しいんだ !

私が嬉しさに胸を熱くしている間に、今度こそ返す言葉もなくなったのか、町田さんはあわてて逃げていった。

そして二人残されて、私たちの前にはさっきまでと同じ光景。

「ごちゃごちゃした裏通りの、人の行きかう普通の道。」

でも、さっきまでとは何かが違う。そう、二人の間を流れる空気が。

「あ、あの……ありがとう、月也くん」

背中にかけて私の言葉に、月也くんはゆっくりと振り向いた。さっきまでの冷たい顔は、なんだか微妙にその色を変えたように見える。

「別に」

「あんたのために、やったんじゃないから。でしょ？」

ふざけたように後を取った私に、月也くんは一瞬見開いた目を、すぐにそらした。

「でも、やっぱり嬉しかった……月也くんは、私の思ったとおりの人だった！」

嬉しくて、満面の笑みになった私に、月也くんは無言のまま、停めていた自転車を取り出す。

「乗れよ」

自転車の後ろを指して、無表情に言われて、私はすぐには動けなかった。

「早く乗れって！ 家、隣の駅なんだから？ 送ってやるから」

「えっ、本当？ で、でも、どうして知って」

言いかけた私は、頭に浮かんだ救世主の面影で、口をつぐんだ。

そうか、もしかして、月也くんにも私の情報が伝わってた？

「あ、ありがとう！」

急いで乗った私に、月也くんはゆっくりと自転車を走らせる。

「またあんな奴に捕まったら困るから……それだけだからな」

ぶつきらぼうに呟いた、彼の耳が気のせい少し赤く見えて

私は微笑んだ。

「月也くん 私、やっぱりあなたが大好き！」

私の感極まった叫びに、月也くんは思わず自転車をよろけさせて、あわてたように立て直した。

「よ、よく、そんなこと飽きもせずにも度も言えるな……」

今度こそ、完全に照れ隠しのようにぼやく月也くんの背中に、私はしっかりと抱きついた。

「だって、本当だもん！」

「……勝手にすれば」

負けずに言った私の耳には、そう呟いた、月也くんの小さな声が、確かに届いたんだ。

始まったばかりの私の恋に、やっと訪れた奇跡。
小さな、小さな芽吹きを逃さないように、私は広い背中を、しっ
かり捕まえた。

(後書き)

べたな「出逢い」がテーマということで、なんと他候補三作も上げて書き比べてみる、という作業を経て、ようやく完成したのがこの作品です。

というのも、自分が天然な「べた」好きであるのはなんとなく自覚していたものの、あえて「べた恋」を書こうと考えると、すごく難しく思えて、なかなか書き上げられませんでした。

これが、「べた恋」参加作品としてふさわしいのか、それに作品の出来自体も不安ですが、自分なりに思いを込めて書きました。

未熟な点など、何でもコメントくださると嬉しいです！

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1835e/>

星と月の奇跡

2009年3月24日09時28分発行